

近森病院附属看護学校 学校関係者評価

（評価期間：2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日、公開年度：2024 年度）

各項目評価

評価項目	自己評価(課題・今後の改善方策など)	学校関係者評価
1.教育目的	教育理念・教育目的は学校指定規則に沿った内容であり整合性がある。教育理念・教育目的は、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーと連動し、看護・看護教育・学生観は教育内容に反映できている。また、教員に対する指針として、前年度から継続し学生観や教育観等を授業に反映できるよう新たな取り組みを継続している。また、教育理念、教育目的は、学校長の具体的な指針とともに学校パンフレット、学校ホームページなどに明示されており、オープンキャンパス、外部との会議、実習依頼など様々な場面で伝えている。	学校の教育理念・教育目的・人材育成像・将来像は、学習の手引きや学校ホームページ、パンフレット等に明示され、学内外に周知されている。またアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー、アセスメントポリシーにも反映され、教育内容に生かされている。 新カリキュラムの編成にあたっては、上記 4 つのポリシーを教員間で周知し、これを授業デザインに落とし込めるよう、各学年の学生観や学習内容のつながりを授業に反映する仕組みを作った。その結果、授業でのワークシートの活用例が増え、教員の指針としても活用できている。
2.教育目標	教育理念、教育目的・目標は、ディプロマポリシーに明示している人物像と具体的なカリキュラムには一貫性がある。ディプロマポリシーは、新カリキュラム構築にあたり教育目標を具現化し、卒業後に貢献できる看護師像が明確になり、指針となっている。	教育目標は「豊かな人間性」「確かな倫理観」「看護実践能力」を基盤として「多職種の連携」「地域社会への貢献」といった実践者としての能力を育成する側面と、「自己成長」をめざすという学習者の側面から設定されている。これは在学中のディプロマポリシーに関連付けられるとともに、卒業後の継続教育の考え方として位置付けられている点で特徴がある。
3.教育課程 経営	新カリキュラムが開始して2年目となり、前年度に引き続き本校の特色ある看護教育を実践することができた。新カリキュラムの内容に関しては、外部に向けて雑誌に投稿したり、研究発表を行ったりして一定の効果を確認することができた。教員間でもカリキュラムの構成を意識し、科目間のつながりや学生のレディネスを考慮し、授業や実習など効果的に実践することができた。また、実習においては、実習施設とも事前に十分な打ち合わせを行い、学生の学びを保証できるように実習体制を整えることができた。 今後は、新カリキュラムの効果が可視化できるように、学会発表や雑誌投稿など外部に発信していくとともに、教育の質の向上を目指すためにも教員の育成を進めていく。	新カリキュラムの構成は厚生労働省より提示された看護師養成所3年課程の考え方を基盤とし、当校の特徴を活かした内容となっている。例えば臨床判断能力の基盤となる解剖生理学・病態生理学、地域・在宅看護論、ICTに強い学生の育成、急性期医療・看護の学びなどであり、その教育効果を確認している。 臨地実習では、専門領域の専任教員が主に担当できるように配慮し、実習指導者会などにおいて、実習指導者と教員との意思疎通を図っている。インシデントに関しては、事故発生後早急に教員間で情報共有することを確認するとともに、同じ案件が二度と起こらないよう学生にも周知している。また専任教員や実習助手を採用するなど、養成所の指定要件を満たす人員配置を行うことができている。
4.教授学習 評価過程	新カリキュラム開始から2年目を迎え、教育課程編成・実施の方針に基づき、体系化された授業内容、実習内容の成果があらわれてきている。又授業評価の回収方法や集計、担当教員への返却方法が確立されたことで前年度の課題であった授業内容や方法の改善に活かすことができている。今後は、入学直後から在学中そして卒業時・卒業後まで成長過程を多面的・段階的に検証し、教授学習へとフィードバックできるようにしていきたい。	授業は「基礎分野」「専門基礎分野」「専門分野」に分けられ、体系的な学習を行っている。新カリキュラムになって、授業内容間の重複や整合性を見直した結果、学生からもその成果が見える反応や言動、記録があった。また前年度に引き続き電子書籍やCKSナーシングなどを使用したことにより、授業だけでなく実習にも活用でき、学生の学習の幅が広がった。 授業評価は終了後すぐに行い、外部講師も含め、その結果を早い段階で担当教員に返却し、授業改善に努めている。また学習の手引きにはシラバスや手引きの活用方法が明記され、学生自身が科目の進捗状況を確認しながら学習計画を立てて学習できるよう工夫されている。

評価項目	自己評価(課題・今後の改善方策など)	学校関係者評価
5.経営・管理過程	管理者は教育理念・教育目的の考え方を明示し、教職員もそれを理解し組織は役割機能を明確にしている。予算は、収支計画にもとづき執行をし、ホームページに財務情報を公開している。業務の効率化にシステム導入を試みている。アドバイザー制度やカウンセラーによる学生対応、奨学金や各種支援制度などを周知し、学生の7割が利用している状況である。自己評価で明確になった課題を次年度の課題として改善できる様に取り組んでいきたい。	教育の理念・目的を明確にし、財務情報や自己点検評価の結果を含めてホームページに公開している。これらの条件を満たした結果、高等教育修学支援の指定校となった。入学生の26名がその支援を受けており、指定校としての成果につながっている。 教育備品や施設設備も計画的に整備され、タブレットの使用やシステムの導入など、DXを推進する学内環境を整えた。組織体制も職務分掌規程に明示され、意思決定のシステムも明確である。 教員が学生のアドバイザーとなり、学習面や生活面の相談・支援を行うとともに、家族と一体となった支援やカウンセラーによる学生相談を行っている。毎年自己点検評価を行い、学校関係者評価委員会の指摘があれば、改善する体制ができています。
6.入学・広報活動	アドミッションポリシーを設定して、入試方法を検討している。また、広報活動は、計画を策定して進学相談会やオープンキャンパス等を行い、入学希望者に必要な判断材料を提供して、本年度は、入学定員が満たすことができた。	学生募集の活動計画を毎年策定し、募集パンフレットの見直しを行うとともに、学内情報をホームページで公開している。また高校訪問やオープンキャンパス、個別説明会を行うことによって、入学定員を満たすことができています。授業料の総額も、県内の私立看護学校と比較して低く抑えられている。 学校ホームページ、Instagram、パンフレット、病院広報誌などを通して、保護者や地域に対して学校の情報発信を行っている。学校のPR動画を、帯屋町の大型ビジョンへ継続的に公開、発信している。
7.卒業・就業・進学	卒業時の技術到達状況調査や就職(進学)状況など、卒業直後の状況は把握できている。比較的卒業生が学校を訪ねてきてくれることや、同窓会の開催も実現したことなどから、一部の施設・卒業生の現状は把握できている。 一方、連絡のとれない卒業生、情報がない就職先に関しては、こちらから訪問または調査票を送付する、あるいはクラスメイト同士など横の繋がりも活用しながら、卒業生の現状、課題の把握に努め、学内の教育内容、教育方法の検討に活用する必要がある。 今年度は国家試験不合格者が数名おり、就職先と連携を取りながら、次年度の合格に向けて、就業継続に繋がるようにフォロー体制を整え取り組んでいる。卒業後も、就業先や卒業生とできるだけリアルタイムに情報交換ができる体制と関係性を整え、教育の成果を評価すると共に、求められる支援を検討していく。	看護技術経験表を用いて卒業時の看護技術の到達状況を分析するとともに、アセスメントポリシーに沿って計画的に評価を行っている。 アドバイザー教員が学生の就職活動のサポートを行い、就職率は100%であった。また各学年でアドバイザー教員や国家試験対策委員を中心に模試や学習課題を計画し、国家試験全員合格に向けて取り組んでいる。 2023年12月に同窓会を開催し、1期生～7期生が集まった。ただ、参加の卒業生は現在の活動状況を共有できたが、近森会を離れた卒業生に関しては活動状況を把握できていない点が課題である。 関連病院において教員がラダー等に関する継続研修を実施し、卒業教育を行っている。今後は、実習先や就業先を含めたすべての病院、施設等と連携を図ることが課題である。
8.地域社会活動	地域社会のニーズの把握は、学校連絡会を通じた県内の教員間の連携、職業実践課程における外部委員との交流、近森会グループとの交流・連携を通じ継続して実施できている。地域への学校の情報発信は、学校ホームページやパンフレット、Instagramなど複数の手段を使い実施している。地域社会との交流や貢献では、学生が看護の対象者を生活の視点で理解できる教育に取り組む地域社会とかかわる機会が増えた。また、献血活動はじめボランティア活動も継続して実施できている。今後も、地域貢献という視点での学校づくりを行っていく。	献血活動や学園祭を再開、実施するなど、コロナ禍前の地域活動を行うことができるようになった。学校全体で献血サポーターに登録し、学園祭において献血を実施するなど、継続したボランティア活動を行っている。 学生に対して様々なボランティアを紹介し、これをクラスで取りまとめるなど、学生のボランティア支援に力を入れている。龍馬マラソンでは、1年生全員がボランティアとして参加した。 「生活と文化」「地域・在宅看護論」の授業においては、地域でのフィールドワークを取り入れながら、高知県の教育文化を学んでいる。

評価項目	自己評価(課題・今後の改善方策など)	学校関係者評価
9.研究	研究に関する教員の意識は高く、自主的に取り組んでいる。研究の取り組み進度は、計画的に実施することが難しい状況にある。経験豊かな教員の配置や文献検索等の環境は整っているが、時間の保障等には課題がある。2023 年度は3演題の学会発表の実施と看護学雑誌等への投稿も継続できた。	教員が自主的にテーマの抽出を図り、研究に取り組んでいる。2023 年度は医療マネジメント学会、高知県支部集会に2 演題、令和5 年度高知県看護協会研究学会に 1 演題の発表を行い、看護学雑誌等への投稿を行った。研究経験の豊富な教員が助言等の支援を行っているが時間の確保など、研究環境の保障が課題である。